

「行列のできるお店」。

繁盛している店の代名詞として、最近の情報誌の紙面をよく飾るフレーズです。店の主人が自慢の料理に腕をふるい、それを上手に宣伝できれば店の前には瞬く間に行列ができます。お客の方からすれば、行列は迷惑なこと、御馳走を食べられる幸せをひたすら夢見てじっと列に加わっているしかありません。また、その長蛇の列を横目で見ながら通り過ぎていく人たちもいます。「たいへんだから、俺は並ばない」といいながら、その視線に、どこか羨望の眼差しが含まれていることがよくあります（ちなみにこの企画展の担当者は、このタイプです）。あるひとつの店の行列をめぐっても、それを「演出するひと」と、それに「加わるひと」と、それを「眺めるひと」、それぞれの思いが交錯していることがわかれると思います。

話は突然変わって、江戸時代の大名行列のことになります。徳川將軍のいる江戸と国許を行き来する参勤交代をはじめとして、江戸時代にはさまざまな場面で武士たちの行列が仕立てられました。これが今回の企画展のテーマ「武者たちが通る」です。

さて、時代劇などでは、大名行列が通ると沿道の人々が一斉に道の脇によけて上下座する場面を見かけます。「駿府城下行列図屏風」には、道の中央を通り過ぎる大名行列を、門前に座って迎える庶民の姿が確かに描かれています。しかし、描かれている人々の多くは、普通の姿勢で行列を眺めていたり、何もなかったかのように歩き去っています。みなが上下座しているわけではありません。こういう事例は最近他にも紹介され、どうやら時代劇のお決まりのシーンがやや怪しくなっています。

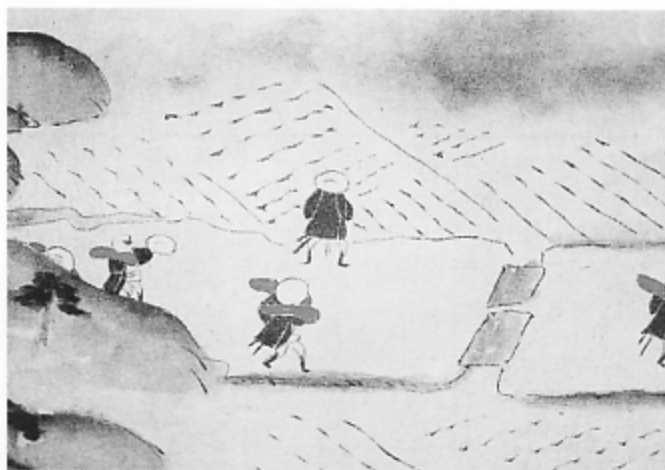
道中行列のようすについても、ちょっと意外な光景が見えてきます。「奥州街道絵図」には、山道や町中で隊列を崩しバラバラになって歩く侍たちのようすが描かれています。武器を立て掛けて茶店でくつろぐ者や、後ろ向きで畦道に立ち小便をしている者もいます。行列絵図に描かれるような立派な隊列は、じつは江戸や故郷の城下町を晴れやかに行進する場面だけに限られていたようなのです。

また、諸藩の行列の参加メンバーのなかに、金をもらって臨時に雇われた者が混じっていたと聞く方も多そうですね。殿様へ忠節を尽くす普段から顔見知りのお供ばかりではなかったのです。江戸には、諸藩の大名行列へバイトを送り込む人材派遣会社のようなビジネスのあったことが、解説された古文書の内容から明らかになっています。

秋の企画展

武者たちが通る 一行列絵図の世界

●会期 平成13年9月22日(土)～11月11日(日)



奥州街道絵図
(個人蔵 三春町歴史民俗資料館寄託)



駿府城下行列図屏風
(千葉市美術館蔵)

このように、参勤交代の行列のイメージが最近だいぶ変わってきました。江戸幕府が諸大名の忠誠を確かめ、彼らを統制するために生み出した制度であるという評価はまちがいでありません。ただ大名の側からも、行列に対する特別な思い入れが生まれてきます。「道中の荷物を入れる括箱に金の家紋を付けさせてください」、「牽いていく馬の鞍の上に虎の皮でできた覆いをかけさせてください」、そんな些細とも思えることを大真面目で幕府に申請するようになります。みんな同じような大名行列。だからこそ、ヨソのちよつとした違い、行列を飾る特権に異常な執着を見せるようになるのです。かくして大名行列は、大名たちの意地やメンツをかけた一大イベントとなってゆくのです。

江戸時代の大名行列について、それを演出したひと(大名)、それに参加したひと(武士たち)、それを見物したひと(庶民)、それぞれの立場に自分を近づけてみることで、まだまだ新しい発見ができるはずです。秋の企画展「武者たちが通る―行列絵図の世界―」は、そのための素材として、行列のようすを描いた絵図、使っていた道具、記録した古文書などを展示室に揃えて皆様のお越しをお待ちしています。



楽山公御行列図巻 (仙台市博物館蔵)

行列のできる企画展を目指す (歴史担当 高橋 充)

■企画展「武者たちが通る」は平成二十三年九月二日(土)から十一月一日(日)まで開催しています。

■観覧料 一般・大学生三〇〇円(二四〇円) 高校生一七〇円(一四〇円) 小・中学生一〇〇円(九〇円) ()は二〇名以上の団体の場合の料金です。

※常設展を観覧する場合には、別に常設展観覧料が必要です。

企画展関連行事のお知らせ

○記念講演会

「行列絵図にみる武家風俗」

講師 歴史研究家 藤本正行氏

日時 一〇月八日(月・祝) 午後二時

場所 当館講堂

「奥羽大名と幕府役人の行列」

講師 福島県史学会会長 菅田 宏氏

日時 一〇月二一日(日) 午後二時

場所 当館講堂

○一般講座

「行列絵図のみどころ」(スライド使用)

講師 当館学芸員 高橋 充

日時 九月三〇日(日) 午後二時

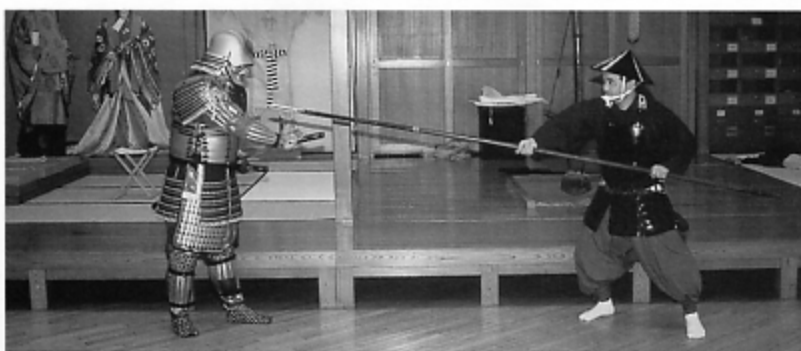
場所 当館講堂

○体験学習

「武士の衣装を着てみよう」

会期中、博物館体験学習室で武士の旅姿や足軽具足姿を体験してみる事ができます。

す。



講演要旨 企画展記念講演会

平成十三年七月十五日(日)

「肖像画研究の現在」 「將軍画像の制作と肖像性をめぐって」 「人はなぜ肖像を求めのかく写真と絵画」

講師 東京大学史料編纂所
画像史料解析センター長 黒田日出男氏
講師 群馬県立女子大学教授 榊原 悟氏
講師 東京大学助教 木下 直之氏

夏の企画展記念講演会は、肖像研究にとどまらず、歴史、美術史、文化史の分野で精力的に活躍されている黒田日出男氏、榊原悟氏、木下直之氏の三氏という豪華な顔ぶれで行われた。

午前中の黒田氏は、はじめに「肖像画研究の現在」と題し、基調講演として話題の「伝源頼朝像」の像主論争にも触れ近年の肖像研究の流れを紹介し、続いて企画展出品作の「石川昭光殉死七家臣木像」と「栗村家宴会図」、関連作の「湯浅家団樂図」についてその性格と内容を次のように紹介、分析された。

「石川昭光殉死七家臣木像」は一七世紀幕藩制成立期の特徴である殉死の思想、死後も主君に仕える三世の関係を造形化したものである。関連する事例として「赤穂義士像」「大石内蔵助木像」「大石主税木像」の制作経緯がおおいに参考になる。

「湯浅家団樂図」は塩川の湯浅邦信一家の



団樂の場面と家屋敷、系図を一画面に描く「湯浅邦信屋敷・系図・家内図」とでも呼ぶべき特異な集團肖像画である。この図を読み解くことにより一九世紀の人々にとつての「家」の重要性、男女、老幼の階層、



湯浅家団樂図(湯浅邦信屋敷図)

家の中で主人の占める位置が明らかとなる。

「栗村家宴会図」は画中の掛軸に描かれた栗村家中興の祖珍英を中心に死者、生者が描かれ、一族の結合を確認する特異な集團肖像画で、背景となっているのは会津藤樹学の思想であると考えられる。両図とも会津地域に特有の作品で、一九世紀の「家」意識を端的に示すものである。

これらの作例の紹介の後、結びとして肖像は時代と社会の表象であり、肖像から歴史を読む試みは豊かな可能性を持つことを指摘された。

昼の休憩を挟み午後からは榊原悟氏が「將軍画像の制作と肖像性をめぐって」のテーマで、將軍画像制作の経緯を一代將軍家斉の肖像画の場合を通して紹介、さらに三代將軍家光の肖像画と彼が深く崇敬した祖父徳川家

康の肖像画との類似についての考察を述べられた。

その中で、將軍画像が狩野派一門を率いるリーダーである頭取格の絵師によって、きわめて厳重かつ慎重に制作されたこと、似ていること(肖像性)への関心が高かったことが指摘された。さらに肖像性の点からは不可思議な家光画像が、実は祖父家康の画像に家光自身をダブらせた「家康・家光同身説」を絵画化したものであるという見解は、肖像画の理想化と肖像性の問題を考えるうえで大変興味深いものであった。

続いて最後の木下直之氏の講演「人はなぜ肖像を求めのかく写真と絵画」では「肖像とは何か」という基本的な、そして深い問いかけがなされた。まず、「みなさんは肖像をお持ちですか?」という会場への問いかけから始まり、定期入れの中の家族の写真から遡り身近な肖像の例を通して肖像の持つ特殊な意味を示唆された。続いて東京大学に残る数多くの博士の肖像画が現在置かれている状況を通して肖像画に特有のさまざまな問題が浮き彫りにされた。

また、スライドで紹介された盆踊り会場の遺影、横須賀の肖像画制作店などは肖像の今日的現場の報告として大変刺激的なものであった。

最後に行われた質疑応答では、最初、話題の「伝源頼朝像」(足利直義像)をはじめ肖像画の像主に関する質問が集まり、会場の歴史研究家藤本正行氏を交え熱心な意見、質問が出された。

この場で午前、午後の丸一日に及ぶ長時間の講演会に最後まで参加して下さった方々に感謝したい。限られた紙面で要約、紹介できる範囲をはるかに超えた内容の講演会であり、以上は講演会の流れをたどったものに過ぎない。詳しい内容は是非当日の講演要旨を御参照いただきたい。県立博物館で配付している他、企画展図録に添付されている。

(要約 川延安直)

縄文時代の埋葬——三貫地貝塚の場合

藤原妃敏 考古担当

貝塚では、貝類に含まれるカルシウムの作用によって、通常の条件では残らない様々な有機質の遺物が腐らないうちに残っている。そのような条件の下、貝塚からはしばしば埋葬された人骨が発見される。貝塚を不要となつた道具や食べかすを捨てる場所とすると、そこに縄文時代人を埋葬することは現代人からみれば理解しがたい行為と思われれるかもしれない。おそらく、縄文人にとっては貝塚は役目を終えた様々の遺物や死者がよみがえることを祈る神聖な場所であつたと考えられる。

三貫地貝塚は浜通り北部の新地町大字駒ヶ嶺にあり、矢田川の南方の小高い段丘に立地している。戦前から縄文時代の遺物を出土する貝塚として知られていたが、一九五二年（昭和二十七年）、一九五四年（昭和二十九年）に本格的な発掘調査が実施され、縄文時代後期から晩期の百体をこえる人骨が発見されて学会の注目を集めることとなった。現在、県指定の史跡に指定され、現状が保存されている。以下昭和二十七年の調査をもとにその墓地の様子を概観してみよう。



三貫地貝塚の埋葬① 屈葬

ると、以下の三つの種類があることがわかる。

- ① 一体で埋葬されているもの——埋葬の姿勢には手足を折り曲げるもの（屈葬）と手足を伸ばすもの（伸展葬）がある。量的にみれば、屈葬の占める割合が高い。
- ② 複数の遺体が合わせて埋葬されているもの（合葬）——中には男の子と女性の合葬がみられ、早世した子どもを母親が亡くなった時点で再埋葬したと考えられる例もある。
- ③ 十数体の頭の骨を円形に並べ、その中に頭の骨以外を納めるもの（集積埋葬）

人骨の分布をみると大きく二つのまとまりに分けられ、その中心には集積埋葬が位置している。集積埋葬は一度埋葬した遺体を集めて再埋葬したと考えられるもので、一時期、墓地の改修を行う際に、まとめて祖先の霊として祀つたのかもしれない。

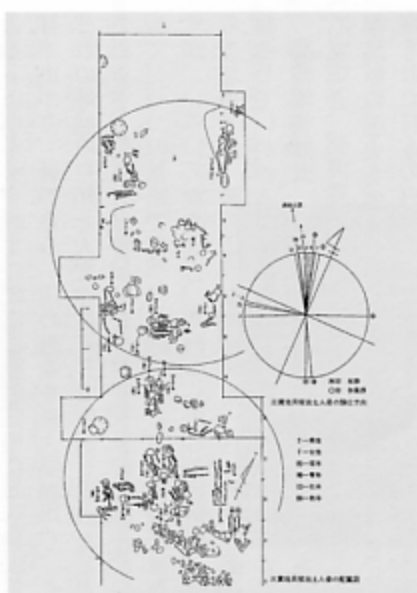
頭の方向（頭位方向）をみてみると、北北西を向くものもつとも多い。北北西の方向には、この地域で信仰される鹿狼山があり、あるいは縄文時代にも魂は山に帰るとする観念があつた可能性もある。さらに興味深いことに北北西を向かない人骨の頭位も規則性を持っていて、それらは北北西の逆「南南東」、九〇度西にずれる「西南西」、東にずれる「東北東」と九〇度単位で方位が決まっている。また、数少ない頭位方向である「東北東」（一例）と「南南東」（二例）のものがいずれも



三貫地貝塚の埋葬② 集積埋葬

埋葬姿勢として例外的な「伸展葬」であるということも注目される。

このようにしてみると、一見して法則性がないようにみえる三貫地貝塚の人骨群を頭位方向、埋葬姿勢、埋葬の位置などについて細かく分析すると、埋葬が強い規制のもとに行われたことが浮かびあがってくる。これらの規制は性（男性か女性）、年齢（子どもか大人など）、出自（そのムラで生まれた人であるかどうかなど）、死因の差など死者の生前の特性を反映しているものと考えられる。墓地は当時の社会のあり方を考える上で私達に重要な情報を与えてくれる。



三貫地貝塚の埋葬位置と頭位



三貫地貝塚の埋葬③ 伸展葬

「肖像に見る福島を築いた人々」

記念シンポジウム

「ふくしま その歴史・自然・未来」

県立博物館・県立美術館・アクアマリン・

まほろん四つのミュージアムから

福島県知事 佐藤栄佐久・福島県立美術館長 酒井哲朗・ふくしま海洋科学館長 安部義孝・福島県文化財センター白河館長 藤本 強・福島県立博物館長 高橋富雄

うつくしま未来博関連事業「シンポジウム ふくしまその歴史・自然・未来」が佐藤栄佐久知事と福島県四文化施設の館長が一堂に介し七月二日(日)、県立博物館講堂において開催されました。各パネラーの発言要旨をご紹介します。

佐藤知事 現代は大変変化の激しい時代です、このような中では宇宙からものを見るような長期的な視点というものが大切であると思います。私は複数主義、多元主義というものを自分の信念にしております。福島には九〇の市町村があり、四〇〇〇の集落があって、二〇〇万人の人々が住んでおります。この二〇〇万人の方々一人一人から出発して、ものを考えていこうとするのがユニバーサルデザインということになります。

現在、大きな課題となっている環境問題については、少なくとも二一世紀の環境はこのようになるということ、開催中の未来博会場で実感できると思います。

また、科学技術は私達の社会に素晴らしい面を残すと同時に、最近少し節度を無くしているのではないかと、このことを強く感じています。

酒井美術館長 関根正二や酒井三良の作品からは、個人を越えた東北の風土、福島の自然や生活、そのような



動力になるのではないかと考えております。

安部海洋科学館長 「福島の自然 人と自然との共生」というタイトルをいただきましたが、「共生」とは実際には禅宗の言葉で、非常に厳しい自然との対峙、それを通して悟りを開くことといわれております。「共生」の意味を欧米の人に伝えるのはかなり苦勞します。欧米の人々は自然を管理するという自然観を持っているのに対して、日本人は自然にどっぷり漬かるのが理想だというような自然観の違いがあると思います。人間と自然が長く持続的に共存していくことが大事であるということ、最近では「持続可能」という意味でサステイナビリティというような言葉が使われるようになってい

ます。
藤本文化財センター白河館長 福島という地域の特徴

感性が強く感じられます。私は東北を含めまして、日本全体が均質化している現状が大変気にかかっています。生物としての人間の能力が衰退しつつあるのではないかと、ということも感じております。しかし、ビビットな感性そのものが地域の文化、過去や現在についての新しい発見をもたらし、更に未来への原

を考えると、やはり、様々な面で接点となっている点にあると思います。縄文時代には福島県域には落葉広葉樹林が広がり、森の恵み、川の恵みを最大限利用し、それぞれの地域の自然と大変仲良くして生活していたと考えられます。現在、世界はグローバル化などといって、一つの基準ですべてを括ろうとする風潮がありますが、いろいろな生き方、それから生じる価値観、それらを尊重する、そのような多様性を一人一人が意識して暮らしていけることが大事であると考えております。

高橋博物館長 福島県に関わりのある歴史、例えば並木堂田善、朝河貫一、保科正之、徳一などを考えますと、福島県の歴史を郷土の歴史、地域の歴史にとどまらず、埋もれた日本の再発掘になるとともに、日本から世界に対して新しい問題提起をしているように思われます。このような視点からわが福島県の歴史や人物というものを捉え直す考え方ができていいのではないかと。国際化時代というものを地方から、福島から発信していくということに対して歴史は十分な指示を与えていると私は考えています。

(約二〇〇名の参加をいただいた今回のシンポジウムは福島県の歴史・自然を語り合い、今後の福島県の未来を考える上で重要な第一歩となる意義深いものとなりました。)



トピックス

「化石をさがそう」「化石標本をつくろう」

八月四日、五日の盛夏の中、梁川町教育委員会と当館の共催で、化石採集と標本づくりの移動講座が開かれしました。集合場所は、梁川町農村環境改善センターで、初日は、同センターから広瀬川河畔に歩いて移動し、化石の採取を行いました。

参加者は、小学生とその保護者の四二名で、竹谷学芸員の説明をよく聞いて採取を始めました。ここには、梁川層という地層が露出しており、当館が所蔵する海獣パレオパラドキシアのメスの化石が、見つかったところで、オスの化石が出る可能性もあり、ハンマーをにぎる手にも力が入ります。

河畔は風がこちよく、たくさんの貝やサンゴ等の化石を探ることができました。二時間ほど採取を行いました。子どもたちよりも保護者の方たちが夢中になっていたようでした。

二日目はセンターで、標本づくりです。仙台からかけつけてくださった宮城教育大学名誉教授の増田孝一郎先生の貝化石を中心としたお話を、スライドを見ながら聞くところから始まりました。新種が発見される可能性もあることなど、わかりやすく説明していただきました。

次に相田学芸員から、クリーニングや標本の作り方、標本ラベルの書き方等の話を聞いて、作業に入りました。慎重に石から化石を取り出し、標本箱に入れてラベルをそえました。化石の名前は、増田先生が教えてくださいました。ムカシタマガイという二枚貝が多く、他にミノシキガイやフジツボ等もありました。これらは、みな海の生きものたちで、一五〇〇万年前は、梁川も海だったことの証明になる化石たちです。

猛暑の二日間でしたが、太古の歴史を実際に体験でき、楽しく学ぶことができた移動講座でした。



◎収蔵資料品展予告

小平瀨天満宮の御宝物

天満宮は学問の神様として誰もが知っている「天神様」「菅原道真」をまつる神社です。

猪苗代湖の北のほとり、磐梯山を眺める白砂青松の地に小平瀨天満宮があります。その始まりは天曆二年（九四八）のことと伝えられ、戦国時代の会津の武将兼名氏をはじめ江戸時代の会津藩主も篤く信仰し、次第に社殿が整えられました。

このような縁起を伝える小平瀨天満宮には、多くの奉納物が遺されていますが、保存管理の上から平成一一年より当館に寄託されています。その内容は神号書幅、画像、和歌書幅、祝詞、誓詞などで、天神信仰の一端をうかがい知ることができ、貴重な資料です。

長く社殿に秘蔵されてきた御宝物が初めて広く一般に公開されます。是非ご覧ください。

(美術担当 川延安直)



「渡唐天神像」

■収蔵資料品展(小平瀨天満宮の御宝物)は平成一四年一月一九日(土)から三月一〇日(日)まで常設展観覧料無料で観覧できます。

常設展 歴史・美術テーマ展示

「幕末の会津 若松城下と会津松平家」
会期 七月三十一日(火)から九月三〇日(日)まで
「仏教美術」
会期 一〇月二日(火)から一二月二日(日)まで
「画題で見る美術―吉祥―」
会期 一二月四日(火)から二月三日(日)まで

講演・講座

◎野外講座
「縄文土器をつくろう 野焼き」
(大川河川敷)
講師 当館学芸員 渡部昌二 伊藤知雄
日時 九月二十四日(月) 振替休業日 午前十時
「身近な地層を観察しよう」
(会津盆地周辺)
講師 当館学芸員 相田 優
日時 一〇月二七日(土) 午前九時

◎実技講座
「古文書入門5 中世③」
講師 当館学芸員 高橋 充
日時 九月二十九日(土) 午後二時
「古文書入門6 中世④」
講師 当館学芸員 高橋 充
日時 一〇月二〇日(土) 午後二時
「古文書入門7 近世①」
講師 当館学芸員 酒井耕造
日時 一〇月三〇日(土) 午後二時
「古文書入門8 近世②」
講師 当館学芸員 酒井耕造
日時 十一月五日(土) 午後二時
「毛糸をつむぐ」
講師 当館学芸員 榎 陽介
日時 一〇月三十一日(土) 午後一時半
「蒔絵 1」

講師 当館学芸員 小林めぐみ
日時 一〇月二十四日(日) 午後一時半
「蒔絵 2」
講師 当館学芸員 小林めぐみ
日時 十一月四日(日) 午後一時半
「わらざりをつくろう」
講師 技術伝承者 鈴木幸雄さん
日時 十一月一〇日(土) 午後一時半
「おもちゃをつくろう」
講師 展示解説員

日時 一二月八日(土) 午後一時半
◎企画展記念講演会
「行列絵図にみる武家風俗」
講師 歴史研究家 藤本正行さん
日時 一〇月八日(月) 休日の日 午後二時
「奥羽大名と幕府役人の行列」
講師 福島県史学会会長 誉田 宏さん
日時 一〇月二一日(日) 午後二時

◎企画展解説会
「武者たちが通る」
講師 当館学芸員 高橋 充
日時 九月 二三日(日) 秋分の日
二四日(月) 振替休業日
午後二時
日時 一〇月 八日(月) 休日の日
二一日(日)

◎一般講座
「行列絵図の見所」(スライド上映)
講師 当館学芸員 高橋 充
日時 九月三〇日(日) 午後二時
「保存科学の世界」
講師 当館学芸員 松田隆嗣
日時 一〇月六日(土) 午後一時半
「福島の仏像 22」
講師 当館学芸員 若林 繁
日時 十一月一七日(土) 午後一時半

◎体験講座
「博物館を探検しよう」

講師 当館学芸員 田中 敏
日時 一〇月二八日(日) 午後一時半
◎映画・ビデオ上映会
「茂庭のシナダ織・炭焼」
講師 当館学芸員 猪巻 恵
日時 十一月二五日(日) 午後一時半

金曜講座

場所 講堂 入場無料

二〇〇一年記念特別講座「徳一」
(第二部 徳一を育てた風土)

◎第一二回
「古寺巡礼その二 観音寺」
日時 九月二八日(金) 午後一時半
◎第一三回
「鉦彫り観音像(カルチャーショック)」
日時 一〇月二二日(金) 午後二時
◎第一四回
「古寺巡礼その三 神野寺」
日時 一〇月二六日(金) 午後一時半
◎第一五回
「神野山―徳一の山―」
日時 未定
◎第一六回
「都の寺 山の寺」
日時 未定

二〇〇一年記念特別講座「徳一」
(第三部 世親の道 徳一の道)

◎第一七回
「平安―菩薩道」
日時 未定
◎第一八回
「三論争史をふりかえる」
日時 未定

実演

場所 体験学習室 入場無料

◎「竹細工」
技術伝承者 阿部吉致さん
日時 一〇月七日(日)

◎「昔語り」
語り部 山田登志美さん
日時 十一月八日(日)
一二月三日(日) 天皇誕生日
語り部 横山幸子さん
日時 一二月二日(日)
◎「注連飾りづくり」
技術伝承者 榊原源隆さん
日時 一二月九日(日)
伝統技術実演
◎「箏のしらべ」(伝統芸能実演)
箏曲演奏家 遠藤千晶さん
日時 十一月三日(土) 文化の日 午後一時半
*開始時間の書いていない実演は、午前十時半から午後一時からの二回行われます。

常設展無料開放日

一二月三日(文化の日)
*毎月第二・四土曜日は、小・中学生に常設展示室が無料開放されます。(一二月二日は除く)

九、一二月の休館日

九月 三日(月)・一〇日(月)・一七日(月)・二五日(火)
一〇月 一日(月)・九日(火)・一五日(月)・二二日(月)・二九日(月)
十一月 五日(月)・一二日(月)・一九日(月)・二六日(月)
十二月 三日(月)・一〇日(月)・一七日(月)・二五日(火)
年末年始
一二月二八日(金)～一月四日(金)